

特集

ソフトウェア工学の 共通問題

編集にあたって

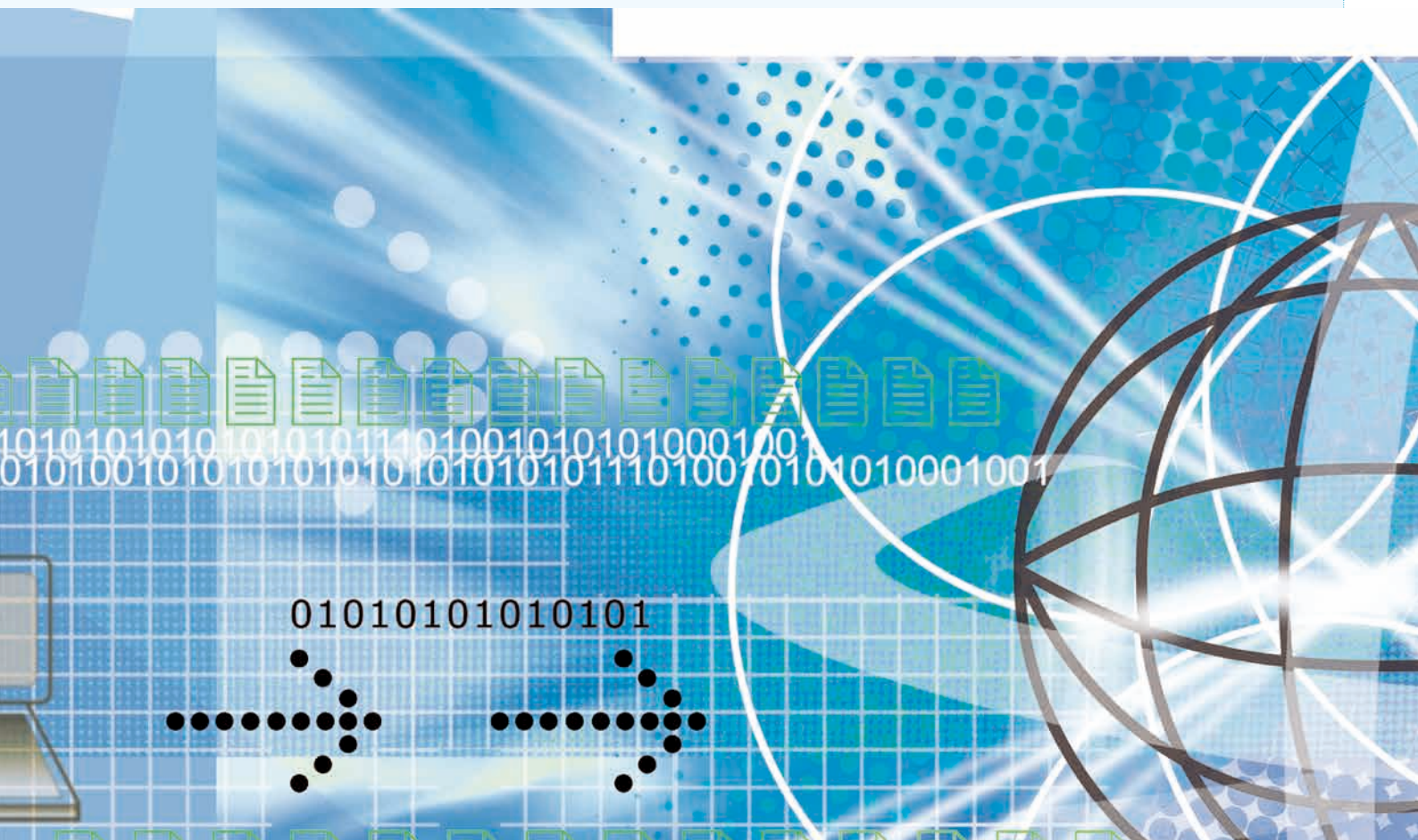
岸 知二(早稲田大学)

野田夏子(芝浦工業大学)

「ソフトウェア工学の共通問題」とは明確な定義の与えられた用語ではない。しかし1984年の本誌特集で設計技法比較評価のための共通問題(酒屋問題)が紹介されて以降、国内のソフトウェア工学コミュニティではこの酒屋問題が繰り返し使われたり、別の共通問題が提案されてきたりした。本特集で触れるように、共通問題が使われてきた背景には、ソフトウェア工学研究の評価の難しさという課題が潜んでいる。1984年の特集から約30年がたった今、ソフトウェア工学研究の視点や対象は大きく広がってきた。そうした中、再度共通問題を切り口に、ソフトウェア工学という分野の現状について幅広く読者に理解いただくことは意義あることと考え、本特集を企画した。

本特集は6つの記事から構成される。なお本特集はソフトウェア工学研究会の開催するウィンターワークショップでの議論がきっかけとなっており、各記事はその参加者によって執筆された。

最初の2つの記事では、現在までの共通問題の姿を紹介する。「ソフトウェア工学の共通問題とは」



(岸, 細合) は, 共通問題とは何かについて簡単に説明した後, 共通問題を通して垣間見ることのできるソフトウェア工学という分野の特徴について説明し, ソフトウェア工学研究の評価について議論する. こうした共通問題は本誌に記載された酒屋問題だけでなく, 海外を含め複数のものがいろいろな形態で提案されてきている. 「**共通問題の現状**」(野田, 片岡) では, こうした共通問題のいくつかを取り上げ, 共通問題の現時点での姿を紹介する.

次の3つの記事は, 共通問題の特集から30年が経過した現在の目線で共通問題について書いている. 「**酒屋問題再考**」(丸山) では, 1984年の本誌特集に記載された酒屋問題を現在の視点で見直している. この30年間でソフトウェア工学自体が扱う視点は大きく広がっており, これからのソフトウェア工学の共通問題に求められる要件を議論している. また30年前のソフトウェア工学が対象とする典型的なアプリケーションは, 酒屋問題に代表されるような業務アプリケーションであった. 情報技術の急速な進化によってソフトウェア工学が扱う対象も多様化

している. 「**組込みソフトウェア分野の共通問題の考え方**」(平山, 中本) ではマイクロプロセッサ技術の発展によって広がっている組込みソフトウェアを, 「**コンテキストウェアアプリケーション**」(鶴林) ではポスト PC 時代のデバイス上でのソフトウェアの典型としてコンテキストウェアアプリケーションをそれぞれ取り上げ, それらを題材とした共通問題について考える.

ソフトウェア工学研究の評価だけでなくソフトウェア開発教育の効果の測定も難しく, そこでも共通問題が使われてきたが, その両者には類似性が多く存在する. 「**ソフトウェア開発教育における共通問題**」(権藤) では, こうしたソフトウェア開発教育についての共通問題の要件について述べる.

本特集を通して, この30年間のソフトウェア工学分野の視点や対象の広がりを共通問題という切り口から眺めていただくとともに, そこに引き継がれているこの分野での研究評価の課題を感じ取っていただければ幸いである.

(2013年7月1日)